

現代レジャー論(2)

学習社会に向けてのレジャーの意義

—語源と社会心理調査を手がかりにして—

松田 義幸

The Meaning of Leisure Toward a Learning Society

—Approach from Etymology & Social Psychological Research—

Yoshiyuki MATSUDA

Etymologically, 'holiday' is 'holy+day', 'holy' means 'whole'. A 'holiday' was regarded as the day on which people could retain 'wholeness', the basic element to live as human being. Leisure was also viewed in the Ancient world as a state of mind and the highest order of enjoyment was found in contemplation and celebration. It was the mind of listening to the essence of things, and it was this mind of leisure that was thought to be an attitude of mind and a condition of the soul that fostered the capacity to perceive the reality of the world. Thus the truly human values were saved and preserved in leisure, and man could retain the faculty of grasping the world as a whole. Realizing his full potential as an entity is equal to reaching wholeness. This was the real meaning of leisure. These implications have been forgotten for a long time, because of social changes.

In pre-industrial society, 'Hard Working-Saving' was a social value, and leisure meant 'relaxation' to supply the energy to keep up the ability to work. In industrial society, after the World Crisis in 1929, 'Having-Consumption' was increasingly valued, so leisure was thought as 'amusement' to enhance the atmosphere to encourage consumerism. In post industrial society, 'Being-Self-Development' has become important and the value of leisure has changed toward 'self-development'. This trend is clearly shown by the analysis of social research.

It is important to develop the learning society in order to provide a condition which accords to people's needs. One of the key concepts of the learning society is enjoying the pastoral life (the life based on nature) as leisure, because nature provides the wholeness that makes it possible for man to regain real human qualities.

Key words: Leisure, Wholeness, Learning society

1. holiday, leisure の語源について^{(註1)(註2)}

ある特定の時代、特定の社会に支配的な「ものの見方、考え方、感受性」が変化するにつれて、言葉の意味・内容もよく変化する。これから問題にしようとしている holiday という言葉もそうで

ある。

holiday はゲルマン系の語で、「holy+day」の合成語で、古英語(～1100年)では hāligdæg といい、ドイツ語の heiligtag と同義である。holy はまた whole でもあり、health, sound の意味を持ち、健

康な (in good health), 完全な (in sound condition) の意味に使われていた。whole の w は 1500 年頃に添加したと考えられており、古英語では hāl で、ドイツ語の heil に対応している。形容詞の heil は、全き、健全な、健康なを意味し、名詞 Heil は、健康、快癒、平安、幸福を、また動詞 heilen は、病気を治す、心身を健康にするを意味している。従って、キリスト教以前は、holy, whole は、「欠けていない」「健康な」「完全な」「全体の」といった意味に使われ、それが神 (Urwesen Gott) に適用されるようになり、holy day が「神聖な日」になったといわれている。今日、仕事を離れた休日 holiday を用いているが、この言葉を使うようになった背景には、holiday が単なる時間からとらえた休業日ではなく、「その人がその人本来になるための日」「心身健康になるための日」「その人が完成するための日」「全体性を取り戻すための日」という意味があり、そして「神聖な日」という意味になったといわれている。また holy, whole には自然の状態 (the state of nature) の意味が重なっている。自然こそは完全体系 (complete system) であり、有機的統一 (Nature is a whole) であり、この自然の状態、秩序に心身を委ねることによって、完全性、全体性を取り戻すことができる。これが自然生活 (pastoral life, country life) であった。

holiday に対立する言葉は workday である。また普通の日 day も、workday といってよいだろう。この day, work においては、人々は、経済の価値に従って、効率性、能率性、生産性を追い求めるから、労働生活はどうしても細分化、専門化の分業的機能に結びつき、holy, whole から遠のいてしまう。またいつからか、人々の生活は都市生活 (urban life) 中心に営まれるようになったが、都市、都市生活も、自然からはなれ、人工的になり、便利ではあるが分業的機能の集まりからなり、労働生活同様、holy, whole から遠のいている。

最近、人々の間で outdoor life, resort life が関心事になってきている。この人々の関心の深層を探ってみると、どうも work day から holy day へ、都市生活 (urban life) から自然生活への呼び戻しが働いているように思える。ハイテク化、オートメ化で、労働環境はますます細分化、専門化してきており、また都市はますます再開発が進み、機能的になり、いずれも生活のバランスを取るた

めに、holy, whole のための day が重要になってきている。

しかし、今日、holiday というときに、多くの人々が①仕事からはなれた日 (day of cessation) ②休養日 (day of recreation) ③休暇 (vacation, ex. in summer holidays) しか思いおこさない。holy day といって初めて「聖なる日」を連想する。古英語時代の健康性、完全性、全体性を思いおこせる人はきわめて少ない。ところが、このように holiday の語源を調べてみると、現代人の自然志向、outdoor life, resort life, pastoral life, country life 志向の原因を見つけ出すことができる。

もう一つ、holiday と同じように、leisure についても語源を調べてみたい³⁾¹¹⁾。今日の人々の多くは、leisure とは work の否定 nonwork と受けとめている。しかし leisure の重要さをよく理解していたアリストテレスの頃の古代ギリシャにおいては、leisure を scholē といい、この scholē の否定 a-scholē (a-は否定を意味している) が、business, occupation, work を意味していた。この scholē に school, scholar もつながっており、アリストテレスは「ニコマコス倫理学」の中で、「幸福はレジャー (scholē) にあると考えられる。なぜならば、われわれは平和を求めて戦争をするように、レジャー (scholē) を求めて働く (ascholē) ののである」と、scholē の価値について述べている¹⁾。leisure は、このように nonwork ではなく、自由な心の状態 (theoria, 英語の contemplation) で、学問、自由学芸、文化を楽しみ、その人がその人本来に向かうこと、完成に向かうこと、全体に向かうことを意味していた。古代ローマでは、leisure を otium といい、work にはその否定形の negotium を使っていた。negotium はここからきた言葉である²⁾。なお leisure そのものはラテン語の licere (許可されている) からきているが、直接には中世英語 (1100~1500年) の leisere と古仏語 (~1400年) の leisir からきたと思われる。leisere → leisure と leisir → loisir の二つの流れを読み取れるからである。

ところで、今日、leisure は、レジャー産業、レジャー・センターと言った意味に使われている。

また、レジャーはレクリエーションと同じ意味にも使われている (これはなにも日本だけではなく欧米においても同じ)。しかし、アリストテレスは、We work (ascholē) in order to have leisure

(schole)¹⁾

と述べ、*anapausis* (rest, relaxation, recreation) と *paidia* (*amusement*, entertainment) は work の生産性を下げないようにするための手段で、それは *ascholia* の側に属しており、そしてその *ascholia* は *schole* の手段であって、*schole* (*leisure*)こそが人生の目的であるととらえている。しかしこの *leisure* も、都市化、産業化のプロセスの中で、いつからか本来の意味・内容を失ってしまった言葉である。holiday と同じように、どうやら元の意味・内容に戻して使った方がよい時代を向かえつつあるように思う。

2. Recreation から Amusement へ、そして Leisure^{(#4)(5)(6)}へ

いかにすれば、holiday を holy day に、leisure を schole に、再生させることができるか。この問題をいましばらく、人々の「ものの見方、考え方、感受性」の変化に関連させて考えてみたい。

かつて、アメリカのシンクタンク、Midwest Research Institute (MRI) は、レジャー研究プロジェクトの中で、社会変動を、人々の「ものの見方、考え方、感受性」の変化からとらえ、これを *habitus mentalis* の変化と名づけたことがある。英語の *mental habit*、日本語の精神の習慣、にあたる。この *habitus mentalis* がどの様に変化してきたか。

MRI 研究グループは、*habitus mentalis* を三側面から比較検討をしていた。第一は生活倫理や認識の方法である。どの様な生活倫理で生きているか。次に確かな認識とはなにか。それはどの様にすればとらえることができるか。第二が社会システム理論である。その社会システムの性格とその働きについての説明である。第三は社会システムのマネジメント、社会的指導についてである⁷⁾。

そこで、ここではこの MRI の三つの視点を借りながら、前工業社会 (pre-industrial society) → 工業社会 (industrial society) → 脱工業社会 (post-industrial society) の変化につれて、*habitus mentalis* がどの様に変化してきたかをとらえ、この中にレジャー問題を位置づけてみたい。

前工業社会——「勤勉—節約」の生活倫理

人類の歴史を 1 万年くらいの単位でとらえると、つい昨日まで、いくら働いても食べるのがやっという貧乏の時代であったといえる。この単位

の下では、日本、欧米諸国も、貧乏(生理的充足)の時代から自由になったのは、つい昨日のことである。従って、農業中心、家内制手工業の前工業社会においては、何もしないで、ポケットとして、遊んでいることは、悪徳と考えられていた。そこで洋の東西を問わず、怠惰を戒め、勤勉を奨励する生活倫理が尊重され、それに関連する多くの言葉を必要とした。例えば、日本においても、心のたるみや、心のゆるみを意味する「おこたる」の一字をとってみても、怠、惰、懶、慢、懈と多く、二つ重ねて怠惰、怠慢など強調して用いていた。英語の表現にも *idleness*, *laziness*, *sloth*, *inactivity*, *indolence*, *sluggishness* などあり、「小人閑居して不善をなす」と同じように、*Idleness is the parent of all vice*(怠惰は悪徳のもと)といった諺もあった。一方、勤勉、骨折り、精を出す、心をつくす意味の「つとめる」には、勤、務、労、力、強、役、業、職、勉、努など多く、これも二つ重ねて、勤務、勤勉、職業、努力など、やはり強調して用いてきた。英語の表現をとっても、*diligence*, *industry*, *work*, *effort*, *labor*, *business*, *occupation*, *negotiation*, *job*, *duty*, *operation* さらには関連で *seriousness*, *earnest* といくらでもあげることができる。

労働の尊さについては、古来からよく語られており、前 8 世紀頃のヘシオドスの「労働の日々」はよく引用される。労働は飢えから自由になる方法として神々が与えてくれたものである。労働を尊ぶことこそ人間の勤めで、飢えは怠惰な人間に必ずつきまとう。怠惰な生を送るものに対しては、神も人も憤る⁸⁾。

この労働尊重の教訓は、古代ローマの大カトー、プロティスタンティズムのカルヴィン、「時は金なり」をといたベンジャミン・フランクリン、唯物史観のマルクス、レーニンへと引き継がれてきた。

こういう時代、社会にあつては、自由時間は労働の生産性、効率性、能率性を下げないようにするためのミニマムの *rest*, *relaxation*, *recreation* (アリストテレスのいうところの *anapausis*) に限られていた。もっともこうした倫理観を支持している人たちは、今日の日本、欧米諸国にまだ少なからずいる。社会学者ディヴィッド・リースマンはこうしたパーソナリティを内部志向型 (*inner-direction*) と名づけ、チャールズ・ライク¹²⁾は、意識 1 (伝統的価値観) と名づけた。この時代、

社会の経済理論は、人々はいくら勤勉に働いても、社会全体の欠乏を充足することは難しく、需要と供給の調整は、アダム・スミスのいうところの見えざる手 (invisible hand) に委ねるのが一番よいと考えていた。この経済学のことを、今では古典経済学といい、経済システムのマネジメントで大切なことは、人々を勤勉に働かせ、節約をして貯蓄をさせ、それを投資にまわし、生産活動を刺激し続けることであった。

工業社会——「所有 (to have) —消費」の生活倫理

ところが、このような生活倫理は、1929年の世界大恐慌などを契機にしながら変化することになる。「勤勉—節約」の生活倫理、古典経済学に代わっててきたのが「所有—消費」の生活倫理と近代経済学である。大切なことは、所得を節約して貯蓄に回すことではなく、所得を消費に回すことである。所得が足りないときには、将来手にいれるであろう所得を予定して、それを消費に回すことである (credit)。政府も借金をして公共投資に回してもよい。いわゆる需要と供給の調整を見えざる手に委ねるのではなく、見える手 (visible hand) を用いて、経済システムを積極的に操作し、人工的に消費者の欲望を開発し、生産活動を拡大し続けることである。こうしたシナリオに沿って開発された経営システムが、大量生産 (mass production) →大量販売 (mass sales) →大量消費 (mass consumption) のマス・マーケティングである。このシステムを導入することによって、経済活動は長期にわたって拡大し続けることができ、人々は所得を増して欲しい財貨・サービスを「所有 (to have) —消費」することができた。企業は財貨・サービス (レジャー財貨・サービスも含めて) の市場を拡大するために、広告活動で絶えず人々の欲望を開発し、そこにセールス機会を見つけた。

(ガルブレイスが依存効果 dependence effect と名づけたもの) しかし、人々は他人との比較で自分の生活の水準を測るようになり (デューゼンバリーが誇示的效果 demonstration effect と名づけたもの)、気持ちにこれで満足という落ち着きをなくしてしまった。人々は消費者 (consumer) として扱われ、この消費者は、他人に誇示できる財貨・サービスの「所有—消費」に幸福、ステータスを求めるようになった。ディヴィット・リースマン¹⁴⁾¹⁵⁾は、このような生き方を他人志向型

(other-direction) と名づけ、チャールズ・ライク¹²⁾は、意識II (組織重視の価値観) と名づけた。

生活倫理が「勤勉—節約」から「所有—消費」に代わると、人々はいつしか「労働からレジャーへ」とはならず、「労働から消費へ」向かうことになった。このような状況の下では、消費者の欲望、社会的欠乏が、人工的に拡大し続け、人々の生き方は「労働—消費—労働……」のサイクルにはまり込んでしまう。自由時間の過ごし方も、ビジネスにとって市場開発の機会となり、休息・休養よりも、娯楽・気晴らし (entertainment, amusement アリストテレスがいうところの paidia) が重視され、mass leisure として市場経済の中に組み込まれることになった。

中でも日常生活の中で、所有する、持つという to have の価値¹³⁾が、重視されることになった。それは「モノ」の所有だけでなく、「心」(精神的な活動、表現) についても、例えば「知る」とはいわずに「知識を持つ」、「愛する」とはいわずに「愛情を持つ」というようになったのである。ところが、こうした生き方、社会のあり方についても反省が生まれるようになった。

脱工業社会—「存在 (To be) —自己開発 (レジャー)」の生活倫理

欧米諸国では、日本よりも一足、二足先にこうした生き方、社会のあり方に反省が生まれた。反省はまず若者たちの間から対抗文化 (counter culture, youth culture) として出てくる。1950年代に早くもビート世代が現れ、1960年代にはシンプル志向のヒッピー世代が現れる。対抗文化のキーワードは、自由と解放である。既存の生き方、社会のあり方、文化のあり方に対して若者たちは、徹底した批判を浴びせる。多くの知識人、指導者たちが、こうした対抗文化を前にして手をこまねいているときに、チャールズ・ライクは、こうした若者たちの生き方が、やがて「新しい人間、新しい社会」を導くのではないかととらえて、「緑色革命 (Greening of America)」を著わし、意識III¹²⁾と名づけた。ディヴィッド・リースマンも、こうあってほしい類型として自律志向型 (autonomy-direction) を示唆した¹⁵⁾。そして1970年前後に、「所有—消費」の生活倫理と工業社会のあり方に反省を加える著作が、次々と出版される。ローマクラブの「成長の限界」(1972)、E・F・シューマッハーの「スモール・イズ・ビューティフル」

(1973), エーリッヒ・フロムの「生きるということ」(1979) また日本でも神谷美恵子の「生きがいについて」(1966) などが出版される。

これらの中でフロムの所有 (to have) から存在 (to be) へ、持つことから生きることへの転換を説いた著作⁹⁾は、日本、欧米諸国で、人文学、社会科学、そして自然科学にまで大きな影響を与えることになり、「所有—消費」の生活倫理、工業社会のあり方に、根本から反省を加えることになった。わが国においても、存在価値、人間らしく生きることの価値が重視されるようになり、この後、「モノ」よりも「心」重視に傾斜するようになった。

前工業社会から工業社会へ、そしてその社会理論である経済学が、古典経済学から近代経済学へと変わっても、「経済システム=市場経済システム」であった。ところが、経済学者スコット・バーンズが、「家庭株式会社」で指摘しているように、自由時間の増大につれて、賃金をあてにしない生きがいとしての生産活動が増えてきているために、「経済システム=市場経済システム+非市場経済システム」でとらえなければならなくなってきた。スコット・バーンズの予測によれば、21世紀にはいると賃金をあてにした労働時間よりも、非市場経済の労働時間の方が長くなるとのことである。こうなると、経済システムが変わり、その影響は政治、教育、文化を含む社会システム全体に

も及ぼすことになる²⁾。

そこで経済学者アドラー・カールソンは、先進国の失業問題に対して、イノベティブな提案をする¹⁰⁾。

「失業か。失業か。今日の失業はわたしたちが想像力を欠いているために生じたものである。失業とは自ら楽しむことのできない産業人のことだ」

失業の unemployment の o を a に代えて、失業という unemployment の言葉を造って、今の時代は、もう働くために生きているのではなく、人間らしく生きるために働いているのであり、もっと労働時間を短縮し、ワークシェアリングを採用し、自由時間を増やし、スポーツ、自由学芸、文化を楽しむべきだと主張する¹⁰⁾。

そもそも自己開発を意味する self-development の develop は「de(開く)+velop(封)」の合成である。封を開いて手紙を取り出すという意味であり、転じて、その人本来の価値を引き出す (self-development) になった。つまり、その人がその人本来になる (to be 存在) という意味である。holistic, whole の健康性、完全性、全体性につながる言葉である。どうやら、レジャー生活の諸条件は、「存在—自己開発」を可能にしてくれるところまできたようである。問題は主体的にいかにそのための能力開発をはかるかというこ

図1 社会変動とRecreation, Amusement, Leisureの関連

社会のあり方	人びとの生き方	自由時間の過ごし方	社会理論
前工業社会 (Pre-industrial society)	「勤勉—節約」の生活倫理	休息・休養・保養 (rest, relaxation) recreation	見えざる手 古典経済学
工業社会 (Industrial society)	「所有—消費」の生活倫理 (to have)	休息・休養・保養 娯楽・気晴し (amusement) entertainment	見える手 近代経済学 マス・マーケティング
脱工業社会 (Post-industrial society) (Learning society)	「存在—自己開発」の生活倫理 (to be)	休息・休養・保養／娯楽・気晴し／自己開発 leisure, school (sports, liberal arts, craft, pastoral life, travel)	(市場経済+非市場経済) (?) 経済学

とである。

3. 日本人の生きがい構造とレジャー^{註5)}

いかに人間らしく生きるか。この辺で、問題をわが国の今日に移し実証的なデータを取りあげながら考えてみたい。レジャー (schole) 問題との関係で、わが国で臨床的立場から生きがいについて研究を進めてきた先駆者は、神谷美恵子である。財団法人余暇開発センターがこの考え方を作業仮説として、日本人の生きがい構造について、時系列調査でとらえた興味深いデータがあるので、紹介したい。

神谷の「生きがいについて」(みすず書房)は、1966年の初版から今日まで幾度も版を重ねているロングセラーである。世代を越えて、日本人の間で広く読まれ続けている。日本人の生きがいについての見方、考え方、感受性を、よくとらえた名著といわれている。そこで、神谷は、生きがい構造は、生きがいを求める領域とその領域から得られる充足感・充実感からなるとし、領域として、T・リポーの4つの領域(①固体保存への志向 ②種族保存への志向 ③個人の自我の拡張と権力への志向 ④審美的、科学的、宗教的、政治的、道徳的欲求に基づく志向)を発展させ、次の7領域をあげている。

① 生存充実への欲求 (X₁)

平穏に生きること、毎日生活をしていることに対する喜びを指し、これを支えるものとして、経済的安定、身体健康、精神的安定の領域をあげることができる。こういった領域から充足感を得ることができる時、生存充実への欲求が生きがい感を高める。

② 変化への欲求 (X₂)

学問、旅行、登山、冒険は、この欲求を満たしてくれる典型である。これらに共通していることは、経験を拡張したい、征服したいというようなことであって、次の未来への欲求につながる。

③ 未来への欲求 (X₃)

様々な生活目標、夢、野心といったもので、生活目標へ努力する、生活に希望を求める、社会の進歩を願うといった領域をさす。

④ 反響への欲求 (X₄)

大きくは3つあげることができる。1つは共感や友情や愛の交流、2つめが優越や、支配によって、他人から尊敬や服従を受けること、3つめが

服従や奉仕によって、他人から必要とされること。

⑤ 自由への欲求 (X₅)

自律性を求める、主体性を求める、勇気ある生活を求める、こういった領域から充足感を得る時、生きがいにつながる。

⑥ 自己実現への欲求 (X₆)

個性的な生きがいだが、すべて含まれ、レジャー活動で例をあげるならば、文芸、ししゅう、料理、芸術、趣味といったほとんどすべてのものが関係している。もちろん仕事も含まれる。

⑦ 意味と価値への欲求 (X₇)

真・善・美といった領域が関係してくる。

以上7つの欲求領域で充足感を得る時、それがその人に生きがい感を高める。これが神谷の仮説である。ここでは7領域をあげているが、さらに単純化すると、第1に生活の安定 (X₁, X₄) 第2に生活の変化・進歩 (X₂, X₃) 第3に生活の主体性 (X₅, X₆) 第4に生活の意味の追求 (X₇) にまとめることもできよう。

社会調査法を用いることによって、神谷の生きがいについての仮説がどこまで検証することができるか。本来、生きがい問題は定性的な課題であって、定量的に取り扱うことのむずかしい課題である。しかし、社会調査法を過信することなく、心理的傾向を確かめる程度に、その有効性を限定して用いれば、有意義な方法ということができよう。

神谷理論の生きがい構造モデル

生きがい充足度 (Y) を被説明変量とし、7つの欲求領域 (X) を説明変量とし、

$$Y = f (X_1, X_2, X_3, X_4, X_5, X_6, X_7)$$

の関係式をたて、数量化理論I類を用いて、最も説明度の高いパラメータを求める。この計量化のねらいは、7つの欲求領域が期待通りに、生きがい充足度に対しプラスの関係(生きがいを高める)であられるか、あられるとしたらどれくらいの影響度を持っているかを、とらえることにある。複雑な因果関係を量的にとらえることのできる数量化理論は、近年、この種の分析によく用いられている。

財余暇開発センターでは、日本人の生きがい構造についての分析を、これまで、昭和49年、昭和59年、そして昭和62年の3回にわたって行っている。そこで最初に全体の傾向を時系列でとらえることから始めてみよう。

第一に、昭和49年、昭和59年の2回の調査では、

生きがい充足度 (Y) に対し、7 欲求領域の充足度 (Xi) は、いずれもプラスに作用していた。それぞれの欲求充足度が高まるとそれはいずれも生きがい充足度を高めるように作用していた。具体的な例をあげると、平和な家庭生活への欲求 (生存充実への欲求) の充足について

非常に満足 > かなり満足 > 普通 > あまり満足していない > 全く不満足
 の順で、生きがい充足度への影響力 (寄与度) が弱まることであった。同じことは他の 6 欲求領域についてもいえた。ところが、昭和62年調査では、自由への欲求と意味と価値への欲求 (永遠なもの・真・善・美への欲求) の二つに若干仮説に沿わない結果があらわれた。自由だから、人生の意味と価値をつかんだからといって、そのことがストレートに生きがい充足度に結びつかなくなってきたということである。この 4、5 年の生活環境、経済、産業環境のめまぐるしい変化の中で、日本人のものの見方、考え方、感受性がゆらいできたのかもしれない。このことは日本人は生きがいはある程度基礎的欲求充足がなされてから、出てくるということなのかもしれない。もっとも、この点についてはさらに突っ込んだ調査研究をしてみたいと思う。しかし、全体としてみれば、過去 3

回の調査で、いずれも神谷の仮説はよく検証されているといってもよい^{表1)表3)}。

第二に、生きがい充足度 (Y) に、7 欲求領域の充足度 (Xi) が、どれくらいの強さで影響しあっているか。ここでは影響度をわかりやすくするために、数量化理論 I 類によって得られた各領域のレンジ (最大値と最小値の差) の全体和の 100 分比であらわすことにした。まず全体の傾向としてみると、そこに生活の安定 → 生活の変化・進歩 → 生活の主体性 → 生活の意味の追求という、欲求の階位があるといってもよさそうである。日本人は、生きがいを支える基礎条件として、身体、精神、経済、社会の安定性を重視し、次に生活の変化・進歩を求め、さらに生活の主体性、人生の意味を求めるようになる。この傾向は過去 3 回の調査によくあらわれている^{表2)}。

しかし、7 欲求領域との関係でみると、いくつか特徴的な変化も見られる。7 欲求領域の中で、「生活の変化への欲求」の影響度が、昭和49年 → 59年 → 62年に、21% → 24% → 10%と変化している。そして、この変化が「平和な家庭生活への欲求」「人間関係を大切にす欲求」「生活の未来への欲求」の影響度の強まりにほぼ対応している。日本人の価値観が「物からころへ」変化していると

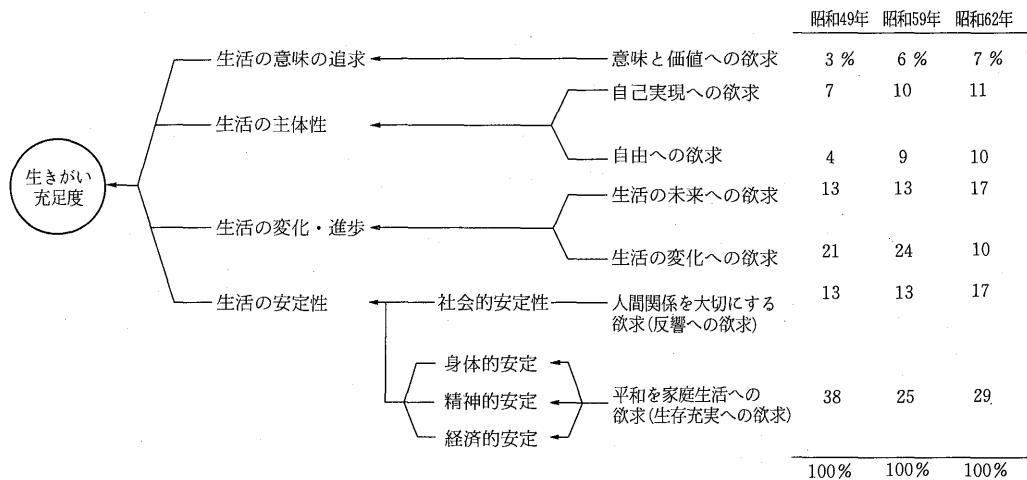


図 2) 日本人の生きがい構造
 — 生きがい充足度への 7 つの欲求領域の影響度

1) 数量化理論 I 類によって得られたレンジ (影響度) の全体を 100 分比でとらえなおしたもの (財) 余暇開発センター調査

表 1) 生きがい充足度(Y)と7欲求領域(x_i)の符号関係

	x ₁	x ₂	x ₃	x ₄	x ₅	x ₆	x ₇
昭和49年	+	+	+	+	+	+	+
昭和59年	+	+	+	+	+	+	+
昭和62年	+	+	+	+	*	+	*

* 関係が薄れている

表 2) 生きがい充足度への影響度

	昭和49年	昭和59年	昭和62年
生活の安定性	51%	38%	46%
生活の変化・進歩	34%	37%	27%
生活の主体性	11%	19%	21%
生活の意味の追求	3%	6%	7%
合計	100%	100%	100%

関心が向かってきているといえるかもしれない。もちろん、全体の変化の基調としては、「物からこころへ」と変化している。生活の主体性、生活の意味の追求が、生きがい充足に強く影響してきているからである。

4. Quality of Life とレジャー教育

神谷の仮説に従い、時系列で日本人の生きがい構造を調査してみると、そこに「生活の安定→生活の変化・進歩→生活の主体性→生活の意味の追

表 3) 生きがい充足度(Y)に対する7欲求領域の充足度の関係

7つの欲求		x ₁	x ₂	x ₃	x ₄	x ₅	x ₆	x ₇
満足度のカテゴリー		平和な家庭生活を求める心	生活に変化を求める心	未来に期待する心	人間関係を大切に する心 (1)	自由を求め る心	自分を表現 する心	永遠なもの を求める心
昭和 四九 年調 査	十分満たされている	0.74	0.48	0.41	0.14	0.04	0.08	0.05
	まあ満たされている	0.11	0.21	0.19	0.08	0.03	0.18	0.05
	どちらともいえない	-0.33	0.03	0.00	-0.04	-0.01	-0.04	0.01
	あまり満たされていない	-0.79	-0.27	-0.19	-0.25	-0.12	-0.12	-0.05
	全く満たされていない	-1.30	-0.65	-0.29	-0.57	-0.18	-0.19	-0.11
昭和 五九 年調 査	十分満たされている	1.05	0.87	0.43	0.42	0.25	0.26	0.38
	まあ満たされている	0.54	0.31	0.31	0.10	0.11	0.23	0.16
	どちらともいえない	0.20	-0.01	0.03	0.09	0.02	0.13	-0.02
	あまり満たされていない	-0.05	-0.19	-0.20	0.02	0.00	-0.14	-0.11
	全く満たされていない	-0.30	-0.56	-0.32	-0.14	-0.06	-0.48	-0.12
昭和 六二 年調 査	十分満たされている	0.55	0.31	0.24	0.08	-0.12*	0.32	0.23*
	まあかなり満たされてい る	0.16	0.29	0.26	0.04	-0.05	0.29	-0.00
	ふつう	-0.24	-0.03	0.01	-0.03	0.05	-0.05	-0.00
	あまり満たされていない	-0.45	-0.17	-0.32	-0.00	-0.03	-0.23	-0.09
	全く満たされていない	-0.89	-0.11	-0.58	-0.76	-0.43	-0.08	0.11

* この欲求領域以外はほぼ各領域の満足度が高まれば、生きがい充実度も高まるというプラス(+)の関係が示されている

いわれて久しいが、最近の生活環境の変化(土地騰貴なども加えて)によって、基礎的生活条件(物、人を中心として)の見直しがおきたとも考えられる。また単なる変化よりも明日につながる欲求に

求」という habitus mentalis の変化を読みとることが出来る。所有(to have)、モノ、量、専門化、細分化、経済の価値と密接に関連したものの見方、考え方、感受性が後退し、代って存在(to be)こ

ころ、質、全体、自然、人間性、文化の価値と関連したものの見方、考え方、感受性が、浮びあがってきている。現に人間性 (humanity) に関係する言葉使いが非常に多くなってきている。

しかし、それではこの *habitus mentalis* の変化が、現実の生活に反映しているかという点、それはまだ兆として現われているだけで、全体にはなっていない。人々が質の高いレジャー・文化を楽しむ能力を身につけていないために自由時間の多くは、いわゆるレジャー産業の供給する娯楽・気晴らしとしての *mass leisure* に吸収されている。スポーツを楽しむにしても、また音楽、演劇、舞踊、美術、学問、文芸、クラフトを楽しむにしても、それなりの能力、方法を身につけていなければならない。しかし、その能力、方法は一朝一夕に身につくものではない。

一般に *recreation, amusement* は、自由時間、または自由時間とお金があれば、誰もが同じように楽しむことができる。従って、*mass leisure* にもなりやすいが、飽きのくるのも早く、それだけにライフサイクルも短い。ところが *leisure (schole)* は、「文化の価値の創造と享受を通じて自己開発をはかるプロセス」ということであるから、それを楽しむためには、自由時間と能力、または自由時間とお金と能力が要る。そして能力が高くなればなるほど、「存在—自己開発」に結びつく。もちろん、活動のタイプや、それを楽しむ時の心の状態で、同じ活動でも、*recreation* になったり、*amusement* になったり、*leisure (schole)* になったりすることもあるが。

わが国だけでなく欧米諸国にも、レジャーは個人の問題であるから、ビジネスや教育の関与は少なければ少ないほどよいという意見がある。しかし、現実、放っておいたのでは、レジャー・文化を楽しむ能力、方法は身につかず、増大する自由(裁量)時間と自由裁量所得は、*mass leisure* に吸収されるだけである。「存在—自己開発」志向は、こうした *mass leisure* から自由になりたいという願望なのであろう。

近年、アメリカ、カナダを中心にして、「存在—自己開発」志向の人たちに、レジャーの世界の価値に気づかせ (*awareness*)、知識 (*knowledge*) と動機づけ (*motivation, desire*) を与える *leisure counseling* が重視されてきている。個々人のレジャー学習支援システム、または広くはレジャー

教育といってもよい。当初は、心理学、精神医学、教育学を背景に、*leisure counseling* のシステム開発がなされていたが、近年は学際的に行なわれている。わが国においては、従来、*counseling* という、クライアントのマイナスの心の状態をゼロの状態に移す心理療法と受けとられていたが、*leisure counseling* は、プラスのある心の状態から、さらにそれよりも高い状態へ移すことに力点を置いている。*leisure counseling* は生活の人間化、または *quality of life* の改善に向けての支援システムである。今後、生涯教育(学習)、学習社会の重要性が認識されるにつれて、*leisure counseling* に一層の関心が集まるものと思う。

そもそも、*holiday, leisure* の語源、で見出しのように、*schole (leisure, school)* は、本来、自由学芸教育(今日でいうところのレジャー・文化教育)を目的にしていた。*holiday* は、自然と関わって人間が人間として完成するための日、全体になるための日を意味していた。古代ギリシャのアリストテレスは、人間の幸福、歓びを、平和によってもたらされるレジャー生活におき、教育も政治も、そのための能力開発を支援すべきだととらえていた。

今日、「レジャーとはなにか」「レジャーとはいかにあるべきか」を問題にする時にこのアリストテレスのレジャー観まで立ち戻る人が多くなってきている。それは、漸く21世紀を前にして、レジャー生活の前提である自由時間と経済的条件が、整ってきたからである。問題は、アリストテレスが指摘したところのコンテンプレーションの心の状態で、レジャー・文化を享受する能力開発を支援するシステム、レジャー教育システムを、いかに充実するかである。

脱工業社会の人間の生き方、社会のあり方についてはいろいろ提案がなされているが、これをレジャー問題からとらえるならば、それは R・M・ハッチンスが提案したところの学習社会 (*Learning Society*) として受けとめるべきであろう。*leisure (school)* は 6・3・3・4 の教育制度ではなく、人生80年どのステージにも関わる制度であるべきだからである。このようにとらえると次に問題になってくるのが、レジャー・文化教育システムの充実をいかにするかということである。

引用・参考文献

- 1) Aristotle ; Nicomachean Ethics, Heinemann-Harvard, 1975.
- 2) Burns, S. (西田俊子他訳) : 家庭株式会社, プレジデント社, 1978.
- 3) De Grazia, S. : Of Time, Work and Leisure, The Twentieth Century Fund, 1962.
- 4) Fromm, E. (佐野哲郎訳) : 生きるということ, 紀国屋書店, 1972.
- 5) Hēsiodos : 仕事の日, 岩波文庫, 1987.
- 6) Kando, T. M. : Leisure and Popular Culture in Transition. The C. V. Mosby Company, 1975.
(邦訳「早川浩一他訳 : 転換期のレジャーと文化を求めて, 時潮社)
- 7) 労働機械振興協会経済研究所編 : レジャーレクリエーションの将来, 海外産業調査46-K-2-2 同研究所発行, 1972.
- 8) 小稲義男編 : 新英和大辞典, 研究社, 1980.
- 9) 松田義幸 : ちょっとユーモアを, 福武書店, 1983.
- 10) 松田義幸 : 質の時代, 三笠書房, 1981.
- 11) Pieper, J. : Leisure, Mentor-Omega Books, 1952.
- 12) Reich, C. A. (邦高忠二訳) : 緑色革命, 早川書房, 1983.
- 13) Riesman, D. (加藤秀俊訳) : 孤独な群衆, みすず

書房, 1964.

- 14) Riesman, D. (加藤秀俊訳) : 何のための豊かさ, みすず書房, 1968.
- 15) 14)と同じ。
- 16) 齊藤静編 : 双解英和辞典, 富山房, 1954.
- 17) Seneca, L. A. : Moral Essays II, Heinemann-Harvard, 1979.
- 18) 上田明子他 : 英語基本語彙辞典, 中教出版, 1983.

注

- 注1) 本節は英語学者の上智大学, 渡部昇一教授の助言をいただきまとめたものである。
- 注2) holiday の考証については, 8), 16), 18)の文献を参考にした。
- 注3) leisure の語源には, 1), 3), 11), 17)の著作を参考にした。
- 注4) 1972年1月に経済企画庁が, 欧米諸国の余暇事情視察団を派遣, わが国からのメンバーとして中西尚道(文教大), 宮丸凱史(筑波大), 筆者他が参加。その時の視察報告の内容は, 7), 9)で扱っている。
- 注5) 本節は筆者が労働余暇開発センターにおいて, これまで時系列で調査研究してきたことの要約である。1981年までの分析結果は, 10)で扱っている。